

日本語・日本文化研修留学生対象の「一橋大学を知る」授業 A Class “Exploring Hitotsubashi University” for MEXT Japanese Studies Students

西谷 まり

要旨

本稿では、日本語・日本文化研修留学生を対象に行われた「一橋大学を知る」ことをテーマに掲げた授業について報告する。一橋大学の歴史を書物と小旅行からひもとき、各自が一橋大学関連の興味をもったテーマを探求した。一橋大学の歴史と現状を知ってもらうこと、留学の集大成として執筆する修了レポートのための準備段階として、ある程度の長さのレポートを書き上げることが授業の目的であった。その結果、「一橋大学を知ること」は、ほぼ達成できた。提出されたレポートは4,200字から6,600字に及び、全員がインタビュー調査を行った。この授業のもう一つの目的である留学の集大成として執筆する日研修了レポートは、15,000字～20,000字程度の大部のものである。その準備としての役割もある程度達成できたのではないかと思われる。

キーワード：日本語・日本文化研修留学生、一橋大学、学園史、レポート執筆、インタビュー調査

1. はじめに

本稿では、Seminar for MEXT Japanese Studies Students Aにおいて筆者が行った授業について報告する。この授業は、2019年度の本紀要に執筆した「日本語・日本文化研修留学生クラスにおける新たな試みー一橋大学及び地域を探索するー」の授業を改訂し、一橋大学を対象を絞った（西谷 2019）。

対象学生は2022年9月から1年間、文部科学省の奨学金で留学している日本語・日本文化研修留学生（以下、日研生と呼ぶ）5名である。日研生は日本の大学において1年間、日本語能力、及び、日本事情・日本文化の理解の向上のための教育を受ける外国人留学生であり、応募資格は「日本語・日本文化に関する分野を主専攻として専攻している者」に限られている。

日研生は一橋大学の日本語科目、学部教育科目¹、全学共通教育科目²を履修することができる。そのほかにLecture for MEXT Japanese Studies Students I・II及びSeminar for MEXT Japanese Studies Students Aが日研生用に特別に開講されている。Lecture for MEXT Japanese Studies Students I・IIは留学の集大成として執筆する日研修了

¹ 商学部、経済学部、法学部、社会学部（2023年度からはデータサイエンス学部）の5学部が提供する専門科目

² 英語や他の外国語、数学、情報、自然科学など学部の専門領域にとらわれない基礎力を身に着けるための科目

レポートの執筆を準備し完成するための日研究生全員が必ず履修しなければならない授業であり、Seminar for MEXT Japanese Studies Students A は担当教員が設定したテーマに興味をもつ日研究生が履修する選択授業である。

2. 授業の概要

本稿でとりあげる Seminar for MEXT Japanese Studies Students A は 2022 年度 9 月から 2023 年 1 月にかけて行われた日研究生のみが履修できる選択科目で、一橋大学の歴史をひもとき、各自が一橋大学関連の興味をもったテーマを探求した。一橋大学の歴史と現状を知ってもらうこと、留学の集大成として執筆する日研究生修了レポートのための準備段階として、書物や論文、インターネットから必要な知識を得ること、文献調査にとどまらず、インタビュー調査の手法とそのまとめ方を体験すること、最後にある程度の長さのレポートを書き上げることが授業の目的である。履修者は韓国人 4 名、ドイツ人 1 名の合計 5 名である。

まず、『一橋大学百二十年史』と『一橋スピリット』の一部を輪読し、一橋大学の歴史について共有した。さらには、学園史資料室の職員にも協力をいただき、所蔵されている資料を活用した。一橋大学学園史資料室は国立キャンパスの時計台棟 1 階にある。『一橋大学学制史資料』、『一橋大学学問史』、『一橋大学年譜』、『一橋大学百二十年史』がここで閲覧できる。現在は、附属図書館長を実質的な室長とし、学内資料の収集などの運営を行っている。地下の資料室には、卒業生が講義を直筆で記録した講義録、一橋大学から海外の大学に留学した学生らの体験記など貴重な資料が保管されている。

ひとつおき、大学創設から新制大学に至る歴史を概観したのち、現在大学院博士課程で一橋大学の歴史等を研究している卒業生の Y 氏に水先案内人をつとめていただき、2022 年 10 月 8 日、竹橋の如水会館をふり出しに、銀座の一橋大学発祥の地まで、一橋大学の歴史を辿る小旅行を行った。その、事前準備として以下の課題が出された。

たレクチャーを受けるところから始まった。如水会館から皇居を展望し、一橋慶喜の御屋敷跡(丸紅ビル)を通って、学士会館へ。昔の一橋の校地について説明を受けた。その後、地下鉄で銀座に出て、一橋大学発祥の地の碑の前で記念写真をとって解散した。碑があるのは銀座6丁目、GINZA SIX 前の歩道上で、建物側に「商法講習所」、車道側に「一橋大学発祥の地」と刻んである。

これらの事前学習を経て、各自が興味をもったテーマについて文献調査・インタビュー調査を行い、以下のテーマで、4,200字～6,600字のレポートを執筆した。

- | | |
|--------|----------------------|
| 韓国人 A | 「小平国際キャンパス商圈の通時的考察」 |
| ドイツ人 B | 「一橋大学の交流協定校と留学の経年変化」 |
| 韓国人 C | 「留学生から見る一橋大学」 |
| 韓国人 D | 「如水会について」 |
| 韓国人 E | 「エルメス会について」 |

3. レポートの内容

ここでは、A、B、C、D、E それぞれのレポートについて簡単に内容を紹介する。原文はそれぞれ、4,200字～6,600字の長さであるが、紙幅の関係で要約して掲載する。尚、掲載した内容は学生本人に了解をとったものである。

3-1. 小平国際キャンパス商圈の通時的考察(原文は約5,500字)

一橋大学といえば、多くの人は文教都市である国立のキャンパスを連想するが、小平のキャンパスも「学園西町」という地名、「一橋学園駅」という駅名に影響を及ぼすほど、一橋大学と長い歴史を共にしてきた。しかし、1996年からすべての授業が国立キャンパスで行われるようになり、寮に住んでいる学生でなければ、小平国際キャンパスに行く機会はなくなった。周りには学生のための書店や文房具屋、カフェがなく、食堂の主な顧客層も学生ではなく近隣の住民である。そこで、韓国料理店の店長 K 氏にインタビューを行って現状を把握することにした。K 氏は商店街の一員として、地域の情報に詳しい人物である。インタビューから、小平国際キャンパスの商店街が沈滞していることが分かった。その原因として、筆者は、第一に、授業が行われなくなってから学生の数が少なくなっていること、第二に、学生気質の変化から飲み会がなくなって、お酒による収益が減少してしまったこと、第三に、コロナ禍以降、人々の消費が減少して、未だに回復していないことを指摘している。ネパール出身の留学生に対するインタビューも行い、学生は生活費が潤沢でないこと、商店街の商品には多様性が欠乏していること、インフラの不在などの理由で、小平周辺では消費生活をあまり行わないことがわかったとしている。

この調査結果を踏まえて、以下の提言を行った。大学商圈は地域の歴史と共に成長し、

出会いの場としての機能を果たしている。現在、小平国際キャンパスは消費の活力を失い、顧客が減少している。打開策としては、大学や学生会の自主的なイベント計画などの感性マーケティングが前提にならなければならない。

3-2. 一橋大学の交流協定校と留学の経年変化（原文は約 5,000 字）

一橋大学の交流協定校の歴史と現状、続いて留学の経年変化に関するインタビューを行った。国際教育交流センター長の阿部仁准教授は、一橋生の留学先で最も人気があるのはアメリカとイギリス、次いでヨーロッパであると語っている。留学を希望する学生の多くは英語力を伸ばしたいと思っているからであり、ヨーロッパの多くの国の大学では英語で授業が行われるため、交流協定校の多くはヨーロッパにある。

次に学園史編集室に保管されていたフランス、ドイツ、イギリスへ留学した学生の体験記（1988年から1999年）から、ビザの申請や宿泊の確保、文化や考え方の違いなどで苦労が多かったことを明らかにした。体験記では、宿舎を探したり、ビザを取得することは困難で時間がかかることが語られており、大学が留学生生活をサポートするプログラムやイベントは行われていなかったことが推測される。

さらに、比較のために、最近留学を経験した在学生 5 人にインタビューを行った。5 人全員が留学先の大学の学生寮に住んでいた。3 人は留学先の大学生が 1 人付いて、海外生活に慣れるための手助けをしてくれる「バディ・プログラム」のサポートを受けた。このような留学生支援プログラムのおかげで、留学生たちは、事務的な問題で苦労することはあまりないことが明らかになった。特に 2010 年以降、交流協定校の数、留学生の数の急増に伴い、留学生のための支援プログラムも増え、留学先の国での生活や勉強がしやすくなったり、問題が起きたりしたときに助けてもらえる仕組みができたことを明らかにした。

3-3. 留学生から見る一橋大学（原文は約 6,500 字）

まず、一橋大学に設置された留学生向けの講義は主に Hitotsubashi University Global Education Program(以下 HGP)と日本語科目に大別されると述べる。HGP は、社会科学分野における学際的な科目を提供している。一部の科目を除き、授業は英語で行われる。日本語科目としては、初級から上級まで 7 レベル（初級前半、初級後半、中級前半、中級、中上級、上級前半、上級後半）の日本語の授業を行っており、年間計 70 科目以上提供していると述べる。

次に、一橋大学の留学生に対するインタビュー調査を行った。一橋大学に留学を志望した理由と、現在の留學生活に満足しているかが主なインタビュー内容である。一橋大学を志望した理由として「東京に位置していること」、「商学に特化していること」、「優秀な生徒を指導する立派な教授陣を備えていること」などが挙げられた。興味深かったのは、「日本語が話せない学生向けの授業が備わっている」ということが一橋大学の選択理由であっ

たことである。また、留学生が参加できる様々なアクティビティが用意されており、中でも Language Community は多様な国からの留学生がお互いに言語交換ができるコミュニケーションの場だということをも明らかにした。留学生向けの授業科目と留学生へのインタビューから、一橋大学は留学生が地道に修学できる、素敵な学びの場であると結論づけている。

3-4. 如水会について（原文は約 6,600 字）

まず、他大学と異なる一橋大学の長所は同窓会である「如水会」の存在を真っ先に挙げることができる。本論は、如水会の成立から現在に至るまでの活動を概観し、一橋大学において如水会がどれほど重要な存在であるかを明らかにすることを目的とする。

如水会が結成されたのは 1914 年の 11 月 14 日に開催された創立総会である。如水会という名称は、渋沢翁が礼記にある「君子交淡如水」（君子の交際は水のように淡泊であるが、その友情はいつまでもかわらない。）より命名された。1916 年 8 月 10 日には正式に文部大臣より「社団法人如水会」の設立許可を受け、法人組織となった。同窓会員相互の親睦を図り、その共同の利益増進と同窓会員の社会的活動の基盤とする目的をもって、会員の醸金によって 1919 年 6 月 30 日、如水会館が一つ橋通り 1 丁目 1 番地に落成した。

如水会館において、事業部部長と事務局員を対象にインタビューを行った。インタビューを通じて、一橋大学生の学校と後輩を思う暖かい思いを知り、また、如水会の成立目的である学校の支援と先輩・後輩との縁を大切に思う思いが変わらずに維持されていることを明らかにした。時代が変わり、個人の概念が強くなった現代の社会にとって、如水会は一橋大学の誇るべき学風・文化ではないか。どうかこの伝統が長く続いて欲しいと述べる。

3-5. 一橋のエルメス会について（原文は約 4,200 字）

一橋大学の女性卒業生を母体とし、世界各地で活動する多様なメンバーの自主的な発言や活動をつなぐ、新しいタイプのオープン型ネットワーク、エルメス会について、創立メンバーである Y 氏へのインタビューを通じて探求した。

エルメス会の成立の背景に「女性にとって情報共有のためのネットワークが必要だ」という卒業生の声があった」という。一橋の校章が商業の神 HERMES（エルメス・ヘルメス）の杖であることから由来した「エルメス」会という名前が付き、現在の形に至る。2018 年には国際会議を開いた。どうしたら女性がリーダーシップを育てられるのか、など、女性のリーダーシップに対する談論が繰り広げられた。一部は英語セッションも存在するなど、まさに「国際」という名にふさわしい品格の高い行事であった。意欲はあるが高い地位に上がることができない女性のために勉強会を開いたり、企業に人材を推薦したりする活動とともに、家庭の中での女性についても活発に意見交換を行っている。

E が在籍する K 大学にも、K 大学校総女性同窓会という女性たちの同窓会が存在することがわかった。エルメス会との共通点は、先輩・後輩をつなぐ橋としての役割を果たしているという点であり、情報が何より重要な今の時代に、先輩・後輩間の活発な交流は将来女性にとって有益であるというのが両団体共通の考えだと述べる。

4. プロジェクトを通して得られたもの

「一橋大学を知る」プロジェクトを通して得られたものについて各人が記した内容を以下に述べる。

1. 自分が属している一橋大学が今の所謂『人文社会学科の総合大学』に位置づけになるまでの歴史と同時に、国立市に移転する前の地域への現場調査を通じて、一橋大学をより深く知ることができた。
2. 一橋大学の前身である商法講習所が明治維新と、どのような関係にあったのかを自分を含めた日研生全員のプレゼンテーションを通じて考察することが非常に興味深かった。
3. さまざまな国からの留学生との対面インタビューを行ったが、これはこれから執筆する日研レポートにおいて、主な研究方法になるインタビュー調査を練習する重要な機会であった。
4. 机に座って本で学ぶよりも、何倍も楽しい経験ができた。「1年しか」ではなく、「1年も」ここで勉強することになったため、一橋大学について色々知りたいと思っていた。そしてこの授業を通じて本当に一橋について色々学ぶことができとても楽しかった。
5. 一橋に関するレポートでエルメス会について調べながら、母国で自分が通っている大学にもこのように女性をサポートする団体があるのかも調べられた。一橋だけでなく、自分の大学についても知る事ができる有意義な時間だった。

以上の内容から判断すると、この授業の目的である「一橋大学を知ること」は、ほぼ達成できたのではないかと推測できる。また、提出されたレポートは 4,200 字から 6,600 字に及び、全員がインタビュー調査を行っている。この授業のもう一つの目的である留学の集大成として執筆する日研生修了レポートは、15,000 字～20,000 字程度の大部のものである。その準備としての役割もある程度達成できたのではないと思われる。

5. おわりに

本稿では、日本語・日本文化研修留学生を対象に行われた授業「Seminar for MEXT Japanese Studies Students A」において筆者が行った「一橋大学を知る」ことをテーマに掲げた授業について報告した。2022 年 5 月 1 日現在の一橋大学の留学生数は 809 名となっている。一橋大学の全学生数は 6,187 名であることから、留学生の割合は約 13%にのぼる

(<https://www.hit-u.ac.jp/guide/organization/pdf/outline/gaiyo.pdf>)。これら留学生に一橋大学の歴史と現状を知ってもらう活動は意義のあるものだろう。

日本人学生と留学生が一緒に一橋の歴史探訪の小旅行を企画する、一緒に一橋大学をテーマにプロジェクトワークを行う、一橋大学と留学生の母校について発表をするといった活動も考えていくとよいのではないか。

最後に一橋大学校歌「武蔵野深き」の歌詞を記す。この曲は昭和25年の創立75周年を記念して作られた歌で、作曲は山田耕筰氏である。歌詞にあるように、留学生が「一橋大学は母校である」という認識をもってもらうことを目指して、多角的な活動を行っていきたいと考えている。

武蔵野深き松風に 世の塵をとどめぬところ
新しき朝の光に うら若き血潮さながら
自治の鐘高鳴りひびく 自由の殿堂われらが母校
一ツ橋 一ツ橋 あゝ あゝ われらが母校

参考文献

大澤俊夫（2015）『一橋スピリット』図書印刷株式会社

西谷まり（2019）『日本語・日本文化研修留学生クラスにおける新たな試み—一橋大学及び地域を探索する—』「一橋大学国際教育交流センター紀要」第1号、pp.93-102

一橋大学学園史刊行委員会（1995）『一橋大学百二十年史』凸版印刷株式会社

[https://jfn.josuikai.net/nendokai/dec-club/?fbclid=IwAR0HCTXJUTwY-](https://jfn.josuikai.net/nendokai/dec-club/?fbclid=IwAR0HCTXJUTwY-Xetj2Td82EkU5npmOV2lm9JPAcRQIV5hN1rNLrwgB4X3Cc)

Xetj2Td82EkU5npmOV2lm9JPAcRQIV5hN1rNLrwgB4X3Cc（2023年5月16日閲覧）

<https://www.hit-u.ac.jp/guide/organization/pdf/outline/gaiyo.pdf>（2023年3月31日閲覧）

（にしに まり 一橋大学国際教育交流センター 教授）